

2020/11/08

ヨハネの福音書 講解メッセージ②③

## 『聖霊の働き』

この世界には、理性では理解できないことがたくさんあります。

人間の存在について、始まりを探っていくと究極の始まりとして神に行きつきます。始まりがなければ、何も生まれません。ところが、その神はどこから来たのかを探っていくと、神は永遠であり、始まりがないという結論に達します。このように、矛盾する二つの前提のどちらも正しいと証明できることを二律背反と言います。そして、ここから学ぶことができるのは、人間の理性には限界があるということです。

人間は、すべてを理性で解決できるかのように錯覚しがちですが、理性では理解できないことがたくさんあるのです。それらのことは信じるしかありません。つまり、信仰に理性を介入させてはならないのです。よく「納得したら信じる」という人がいますが、そこには「自分はすべてを知っている」という前提があります。しかし、実際にはそうではありません。理性では始まりを解くことすらできないのですから、神の言葉よりも自分の理性や知性を優先してはならないのです。私たちに必要なのは、納得することではなく、聖書に書かれていることを素直に受け入れ、正しく読み取って信じることです。

### ■ 渴いている者は来なさい

「さて、祭りの終わりの大いなる日に、イエスは立って、大声で言われた。「だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。」これは、イエスを信じる者が後になってから受ける御霊のことを言われたのである。イエスははまだ栄光を受けておられなかったため、御霊はまだ注がれていなかったからである。」(ヨハネ 7:37-39)

「イエス・キリストを信じる者は、その人の心の奥底から、御霊が流れ出るようになる」と、イエス様は語られました。この時、弟子たちにはこの言葉の意味が分かりませんでした。後に次のような出来事があって、わかるようになりました。

「彼らといっしょにいるとき、イエスは彼らにこう命じられた。「エルサレムを離れな  
いで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。ヨハネは水でバプテスマを授けた  
が、もう間もなく、あなたがたは聖霊のバプテスマを受けるからです。」

(使徒 1:4-5)

「聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エル  
サレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となりま  
す。」(使徒 1:8)

バプテスマとは、「浸す」「満たされる」という意味です。「生ける川の水が流れ出るように

なる」とは、「聖霊のバプテスマを受ける」ということです。

聖霊は、よくエネルギーか何かのように誤解されがちですが、人格を持った神様です。私たちをとりなし、助けてくださる神様なのです。そして、聖霊の助けとは、パワーが増し加わるというような意味ではなく、神の言葉を信じられるようになることです。

どのように信じられるようになるのか、それは交わりの法則です。私たちが日本語を話せるのは、日本人と交わったからです。生まれたときは皆白紙の状態ですが、誰と交わるかによって、その影響を受けます。考え方、アイデンティティは交わりによって育つものです。つまり、神の言葉を信じられるようになるには、神と交わる必要があるのです。神と交われれば、神の言葉が真実だと信じられるようになります。教会の中では確信をもって信じられたことが、時間が経つにつれて不安になった経験はないでしょうか。それは、誰と交わるかによって変わるものだからです。

神との交わり、それは祈りです。神様はいつも私たちと共にいてくださいます。ですから、私たちは、いつでも神様と交わることができるのです。しかし、祈りが大切だとわかって、なかなか神様と深く交わる時間を持つことは困難です。祈りの言葉が尽きてしまって5分も持たないという声もよく聞きますし、賛美をしても、聖書を読んでディボーションしてもいいのですが、なかなかそのような時間を取ることも難しいものです。しかし、神との交わりが少ないと、神の言葉を信じることができません。それで、聖霊様は私たちを助けてくださるのです。

## ■聖霊のバプテスマ

「五旬節の日になって、みなが一つ所に集まっていた。すると突然、天から、激しい風が吹いて来るような響きが起こり、彼らのいた家全体に響き渡った。また、炎のような分かれた舌が現れて、ひとりひとりの上にとどまった。すると、みなが聖霊に満たされ、御霊が話させてくださるとおりに、他国のことばで話した。」

(使徒 2:1-4)

この出来事をペンテコステと言います。この不思議な現象は、私たちの理性ではどうも理解できません。

実は、この現象は、長い間誰にも起こらず、過去の出来事だと思われていました。しかし、20世紀の初め、聖書に書かれていることは今も起こるはずだと信じた人々が真剣に求めて祈ったところ、同じことが起こったのです。これがペンテコステ運動の始まりです。この運動は、世界中で同時多発的に起こり、20世紀に大きく成長し、大きな流れを作りました。ペンテコステ運動は、人々を解放して自由にし、異言を語るようになり、讃美歌・聖歌にこだわらずに新しい賛美を歌うようになりました。

この運動が始まった当初は、異言はおかしいという立場を取る人たちもいました。異言は理性では理解できないからです。しかし、聖書の言葉は素直に受け止めることが大切です。それが、使徒の働き時代には、大リバイバルへとつながりました。

私たちの問題は、不信仰です。確信が持てない時、神の助けを得るには、神と交わることが必要です。しかし、1分の祈りで尽き果てるような私たちですから、憐れみ深い神は、神と

の交わりすらとりなしてくださるのです。

「御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます。」（ローマ 8:26）

これが異言です。祈りを通して神と交わりの時間を持つことで、平安と確信を持つことができるようになります。ぜひ聖霊のバプテスマを求め、異言で祈りましょう。聖霊のバプテスマは、理性が聖霊の活動を止めることのないように、私たちを解放するものです。

## ■うわべでさばく人

「このことばを聞いて、群衆のうちのある者は、「あの方は、確かにあの預言者なのだ」と言い、またある者は、「この方はキリストだ」と言った。またある者は言った。「まさか、キリストはガリラヤからは出ないだろう。キリストはダビデの子孫から、またダビデがいたベツレヘムの村から出る、と聖書が言っているではないか。」そこで、群衆の間にイエスのことで分裂が起こった。」（ヨハネ 7:40-43）

群衆の間に分裂が起きた原因は、出身地といううわべでイエス様を判断したことです。うわべは主観であり、真実ではありません。人はうわべしか見ませんから、私たちの理性では真実はわからないのです。

真実を知るためには、真実を知る人から聞けばいいことです。それは聖書です。ところが、聖書を理性で納得しようとしても、とても信じられません。理性はうわべを見ることはできますが、それらを背後で生かしている方を見ることはできないからです。ですから、理性では真実に到達することは不可能なのです。真実を知る道は、聖書を信じるしかないのです。この原則を忘れると、信仰が信仰ではなくなってしまいます。

「その中にはイエスを捕らえたいと思った者もいたが、イエスに手をかけた者はなかった。それから役人たちは祭司長、パリサイ人たちのもとに帰って来た。彼らは役人たちに言った。「なぜあの人を連れて来なかったのか。」役人たちは答えた。「あの方が話すように話した人は、いまだかつてありません。」ると、パリサイ人が答えた。「おまえたちも惑わされているのか。議員とかパリサイ人のうちで、だれかイエスを信じた者があつたか。だが、律法を知らないこの群衆は、のろわれている。」

（ヨハネ 7:44-49）

「自分は律法を知っているからわかる」というパリサイ人たちの傲慢さが表れています。律法という行いの規定で、人の価値を判断することが問題なのです。

御言葉を信じなければ、神がぶどうの木であり私たちは枝であること、私たちが神の体の器官であることがわからないので、人の価値がわかりません。だから、彼らが行いの価値で人を判断するのです。

## ■神は約束を守る方

「彼らのうちのひとりで、イエスのもとに来たことのあるニコデモが彼らに言った。「私たちの律法では、まずその人から直接聞き、その人が何をしているのか知ったうえでなければ、判決を下さないのではないか。」彼らは答えて言った。「あなたもガリラヤの出身なのか。調べてみなさい。ガリラヤから預言者は起こらない。」そして人々はそれぞれ家に帰った。」(ヨハネ 7:50-53)

ニコデモは、律法に書いてあるとおりのことを主張して、イエス様を擁護しました。ニコデモと他の律法学者との違いは、ニコデモは直接聞く人だったということです。ペテロをはじめ、12弟子もまた聞く人でした。私たちにとって大切なことは聞く姿勢です。納得できない時、「自分に納得できないものはおかしい」と批判するのか、「わからないから教えてください」と言うのかで大きく分かれます。

「キリストはダビデの子孫から、またダビデがいたベツレヘムの村から出る、と聖書が言っているのではないか。」(ヨハネ 7:42)

律法学者たちは、自分達の知識に埋没し、イエス様に聞きもしないで、「キリストはダビデの子孫でベツレヘムで生まれる方だと聖書が言っているから、イエスはキリストではない」と断言しました。ところが、イエス様はベツレヘム生まれで、ダビデの直系の子孫です。確かめればすぐわかることですが、彼らは聞こうとしませんでした。これは全時代に共通します。人に腹を立てる人、ケンカする人は、事実を確かめることなく、自分の思い込みで腹を立てていることが多いものです。

マタイの福音書は、「アブラハムの子孫、ダビデの子孫、イエス・キリストの系図」(マタイ 1:1) から始まります。なぜなら、それが救い主に関する聖書の約束だからです。そして、「イエスが、ヘロデ王の時代に、ユダヤのベツレヘムでお生まれになったとき…」(マタイ 2:1) とあるとおり、イエス様は、聖書の約束どおり、ベツレヘムで生まれています。

新約聖書は、イエスは聖書に書かれているキリストであることを証しするための書物です。神は約束を守る方です。聖書が語った約束はすべて成就しているのです。

その方が、あなたは霊の体を着せられ、永遠のいのちを持っていると約束しておられるのです。ですから、私たちは死とは無関係なのです。それを信じるその時、私たちは、苦難を希望と見ることができるようになるのです。今はその希望をおぼろげに見ているだけですが、そのときが来ればはっきりと真実な自分の姿を見るようになると聖書は教えています。永遠に残るものに目を留め、信仰と希望と愛に目を留めて生きましょう。そのようにして、神と交われば交わるほど、信仰が強くなり、神は約束を守って助けてくださる方であることを知ることができるようになります。こうして、神を信頼して平安を得る信仰を手にすることができるようになるのです。